「狂歌」に対する国語学的考察：近世語研究（その三）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23729

「狂歌」に対する国語学的考察

―近世語研究（その三）―

深井一郎

はじめに

「狂歌」は、多く卑近の事物、日常の生活に材を採って、滑稽洒落の想を詠出する遊戯文学と言われる。（註1）内実は遊戯文学の名に値する態のものではなく、高雅を化して卑俗とし、巌粛を化して遊戯とするといった、一種の「言語遊戯」と見るべきであろう。形態は短歌と同様であるが「万葉集」の戯咲歌、「古今集」の俳諧歌などにその源を求めたり、中世初頭の戦記物に多く見られる落首や、院中に設けられた柿本衆に対する栗本衆の詠歌などを、その沿革の道すじに位置せしめるならば、著想題材の卑俗・諷刺・批判のみならず、用語の俗・奇抜・流行語や、語呂合せ・もじりなども、その本質と見るべきであろう。「狂歌」が別名として、夷曲（夷振・ひなぶり）・えびす歌・狂言歌と呼ばれたり、また、ざれごと歌・たはれ歌・へなぶりなどとも言われる所以である。いま国語学的考察を加えようとするのも、このあたりに強い興味を覚えるからである。

一般に「狂歌」と呼称する対称は、中世後期の「永正狂歌合」や「十二類歌合」を始めとし、貞徳の「狂歌百首」や雄長老の「新撰狂歌集」に続く石田未得・半井卜養などが活躍した時代、すなわち従来は歌人や連歌師などが余技遊興として作っていた「狂歌」を、独立した分野たらしめ、その専門の職業人を生み出すに至った時期以後のものと理解されている。以後江戸時代全域にわたって資料が存し、明治に入って急激に姿を消した。江戸期全域に及ぶ資料にも、大きく分けて三つの時期が考えられるようである。まず一つは、寛永から寛文年間に至る間のもので、貞徳・雄長老、未得・卜養などを中心とした上方のものである。これを「前期」とする。この名残は、信海・貞柳・鈍永・貞佐・木端などに受けつがれ宝歴年間ごろまで上方に流行する。次いで第二期は、明和・天明から寛政年間にかけて、江戸の地に流行したもので、「天明調」と呼ばれ、橘州・四方赤良・朱楽管江などを中心とするものである。最後の第三期は、文化・文政期における芍薬亭長根を中心とした「文政調」と謂われるものである。その以前に、鹿都部真顔の唱えた「俳諧歌」体もあるが、質的に大きな差異はないと見られる。この江戸期狂歌の三区分も、近世文学史の通説に従ったまでである。本考では、この三区分のうち、前期の資料に限定した。（註2）

国語学的視点

江戸前期の「狂歌」に国語学的考察を加えるに当って、その視点を定めておかなければならないであろう。それには、まず大きく二つの視点が必要となると考えられる。一つは狂歌の本質によるものであり、他はその時代性によるものである。

狂歌の本質に基く視点としては、それが短歌形式をとる韻文であることが第一である。三十一文字（原則として音節と対応する）を基本とし、内部が五七五七七という文字（音節）数を持つ定形詩である。そこには、散文に見られる叙述や描写が見られないと同様に、主述関係や修飾被修飾関係も異なり、接続詞や連体詞、代名詞などが極めて少くなるという特性を備えているであろうと考えられる。（註3）第二には「言語遊戯」であるという点であろう。著想や題材の卑俗化、批判や諷刺といった内容に呼応して、その表現に現われる「用語の卑俗さ」からは、当然のこととして当時一般の文献資料に姿を見せ難い日常語や流行語、幼児語や隠語、或はやゝ典型化された地方語などをうかがい知ることができよう。さらに特異な技法としての「もじり」や「語呂合せ」などからは、同音異義語の関係や、同音の許容範囲などこれも興味ある実態を示してくれる期待が持たれるところである。これは俳諧における「つけひらき」や「とりなし付け」の如く、二概会の間に媒体を予測して発展せしめるものとは異なり（註4）、二概念間に、近似音・類音の関係（同音ではない場合が多い）のみをよすがとして異なった意味の連関を想起せしめるところに興味を持たしめるものである。このあぶない綱渡り的な連関を予定するためには、この両概念が高い教養分野のものであっては必ずしもその連関が想起されない恐れがあって、この「もじり」や「語呂合せ」は日常的な卑俗な性質のものに限られるようである。以上、狂歌としての質の面からの視点を検討したが、結論的に言えば、音韻や語法の分野にあっては大きな期待は持ちえないと考えられ、語彙の面に比重を置かざるをえないようである。

他方、その時代性による視点については、次のように考えられるであろう。寛永から寛文年間に至る頃といえば、已然として上方に文化の中心は存しながら、しば〳〵東国語が文献に姿を見せる時期であり、総体として東国語の資料は少ないことを考えるならば、たとえ僅がでもその資料が存するならば有意義である。歌舞伎や俳諧にも此時期に流行した「奴詞」などが多少でも見出されないだろうか。或いは上方にあっては、宮廷生活から一般社会へ広がりを見せたと思われる「女房詞」などの存在は見られないのだろうか。このように、此時期ゆえの課題の第一は、やはり、上方語と東国語の在り様であろう。ついで考えられることは、来るべき元禄期の所謂町人文化の隆盛を前にして、室町文化をになった公家・武家の手から、ようやくにその文化が町家の者の手に移行しようとする時期であるところから、この時期の文化の担い手たち（それが出自として公家・武家・町家のいずれであろうと、世を治める者の側にあるのではなく、治められる側にあったことは確かである）の持った「教養の度合」を知ることが出来ようと考えられる。宮廷公家や幕府武家の手にあった和歌や謡曲と異なり、市井の徒に交り、河原小屋に出入りしながら、世間を見透した皮肉・調刺の言辞を弄した狂歌作者たちや、その狂歌を享受し喝采を送った庶民たちの教養の質を知ることは「言語生活」の実態を知る上に、欠くことの出来ない点であろう。たとえば、どのような「諺」を多用したのか、擬音語、擬態語としてどのような語を使用しているのか、というような点も大きな関心事である。

以上、研究の視点をあらまし考察してみたが、このあと、国語学的性質について、少々記述してゆくことにしたい。

音韻面と語法面

音韻と語法とを同一視して述べる心算はない。記述すべき材料の

少なさによるものである。

音韻面では「ひ」と「へ」の「通ひ」が見られる。室町期に見られた「おほかみ→おほかめ」に代表される「(i)→(e)」の一種かとも思われるが、必ずしも規則的ではなく、特定の語に限られているようである。

◆らう人にみやこのはなよさくらあざの
　おふものおほしうらなへをせよ　（堀川狂歌集）

◆春風に愛せられてはてうち〳〵
　かふりをそする野へのさはらへ　（堀川狂歌集）
　……右さはらへのてうちかふり又いたひけにこそ侍れ……

◆荒和祓
　けふのみか毎夜蚊帳の出入に
　夏はらひせぬ家〳〵もなし　（堀川狂歌集）
　はらひはらへの仮名不審

◆左勝
　いにしへのならの都はすいひして
　匂ひをのこす八重桜かな
　右
　をく霧のすふかとみえて花のかけ
　ちひるうこく児桜哉
　先歌ならの都はすいひしで音もせぬ匂ひを残したる心おかしく侍るへひのかなもかよひてこそきこえ侍れ……（堀川狂歌集）
　次いで、音便では次のようなものが見られる。

◆くい〳〵と物を思ひてきのくさるを
　何としてかなぬひてすっへき　（堀川狂歌集）

◆道ならぬおも荷につられころふたは
　霧したんとやまかふ成らん　（堀川狂歌集）

◆毛の色を物にたとへは春胡麻の
　油つほから引たいたこと　（堀川狂歌集）

◆竹の子をぬすまれしとてする警固
　藪から棒をつきたいてもて　（堀川狂歌集）

◆死ぬるとてこせぬ事をしたいたは
　そもたれ人の所行無常そ　（堀川狂歌集）

早く文明本節用集に「真赤　マッカ」と見え、近世中期以降には「こちらのすみに、真かいな物が見ゆるが、あれは何じゃ」（虎寛本狂言・萩大名）「此立田川の紅葉がづつと下へながれていてとまる湊のあたりにはまっかいな色のよい浪がたつであらうか」（古今集遠鏡二）などと見える「真赤」が次のように見える。

◆誰も花を吉野といへはまつかいに
　はらや立田の紅葉成らん　（貞徳百首狂歌）

語法面では、助動詞「た」の用例が見られる。

◆あまの川は衣きたら飛こえん
　けにそらことぞ鵲の橋　（貞徳百首狂歌）

◆わらはべのねいりた内にみるを社
　無念むさうと云へかりけれ　（貞徳百首狂歌）

◆立別いなはいなせよ気にくはぬ
　人としみたら今きつく共　（堀川狂歌集）

助動詞「さうだ」も見える。

◆むさうてきれいな物はうた人の
　心にかゝれる山のはかすみ　（貞徳百首狂歌）

◆たるさうにとる手そみゆる五乙女の
　哥もさなへもなけふしにして　（堀川狂歌集）

打消の助動詞「ない」も見える。

◆片脇へつとそびけろうみたくないに
　邪魔入申す月の村雲　（古今夷曲集）

◆又たぐひあるものでない過去未来
　深ざゑもんか舞のなりふり
　ほかに、次のようなものが注目される。

◆水てとくにかはのあやめがきつはた
　にたりやにたりにためきにけり　（狂歌三百首抄）

興味ある語彙

まず「**文字詞**」について記す。（註5）

◆前関白伝尋公へ淀鯉奉るにそへて　昌俊
　折よくハ申させ玉へふたつ文字
　牛の角もし奉るなり
　返し
　魚の名のそれにハあらずひまのおり
　ちと二文字牛の角もし　（古今夷曲集）

◆題しらず
　礫文字打つけ書にする時ハ
　薄き屏風の紙や破れん　ひさきよ

◆題しらず
　小姫子のかくれごにさへまじらぬは
　もはや桂のほもじなるかよ　（古今夷曲集）

◆蚊遣火
　ふすべつゝ蚊は追ぬれとかしましき
　宿のかもじそやらん方なき　行安

次に「**奴詞**」について記す。（註6）

◆山の手にかゝりかましく見えぬるは
　やっこの比の春かすみかな　（古今夷曲集）

◆くわんくわつな姿ならねとくる春は
　人の目かとにたつ霞哉　（後撰夷曲集）

◆……当世はやり言葉にてよめる
　たまはりし木地みつ組のぬり物は
　うるし〳〵いかたちうけなひ　（後撰夷曲集）

◆月を奴子詞にてよめる
　片脇へつとそびけろうみたくないに
　邪魔入申す月の村雲　（卜養狂歌集）

◆坂東の俗除夜にいり大豆こしらへる時
　やらくさやふんといへることはをもて
　よめる　（古今夷曲集）

　鬼は外福は内へとうつ大豆の
　あたりて老るかやらくさやふん　卜養

右のほか「尻ぽつたて」「つんこえの道」「真昼（まつひる）」「まつかいに」も見える。

「**諺**」を含むものは次のとおりである。

◆山ふきの花見に人のくる時は
　つねよりあかるゐてのさと人
……右ゐてのあかると云世話は出はへのするといへる心か　（堀川狂歌集）

◆菊水をくみし彭祖かなかいきも
　まことにはあらしうその八百
……右彭祖か八百歳はうそにもあれ……
　うその八百千万のかちにて侍るへし。（堀川狂歌集）

（貞徳百首狂歌）

◆壮の日に思ひそめてやたら〳〵と
あはて長ひく恋もする哉
……壮の日しそめぬる事は長ひくといへるさも有事なり……
（堀川狂歌集）

◆つらかりしそなたのしりもわれなへに
わかかけふたに逢そ嬉しき
左歌われなへにかけふたといへる下すのことはさは、その
ほと〳〵に似合たる事にや……
（堀川狂歌集）

◆恋衣そむる紺やのかた思ひ
あさて〳〵といふはかりにて
（堀川狂歌集）

◆顔淵にへうたんをこそかりつらめ
海にうかはんと思ふ孔子は
恋の山にはくしたふれといへれと海にうかふ用心には顔淵
にへうたんをかりけるにやめつらしくこそ
（堀川狂歌集）

◆はなの露も日かけうつれはひるにしほ
ひるはしほ〳〵なれるあさかほ
（狂歌三百首抄）

◆名人の流をくめと末の代は
万の道が下手のかはかな
（貞徳百首狂歌）

◆さらにうまみのなき口つきにて、つむしのゆがみて、へたの横丁につきたるやうにのみありければ、江戸童の口さかなさには、へたの横ずきとてわらひの、しりける。……たとへばへたの皮なりとも、まこと木ざはしにさはすならば、いかでかうまみのいでざらん、しぶがすなはちあまみとは、古人もいひし事ならずや。
（狂歌三百首抄）

◆竹の子をぬすまれしとてする警固
蔵から棒をつきたいてもて
（堀川狂歌集）

次に、「**擬音語・擬態語**」について見よう。

◆春風に愛せられてはてうち〳〵
かふりをそする野へのさはらへ
（堀川狂歌集）

◆龍田山色もこきやこふくたかけの
とさかひとつに紅葉しにけり
（堀川狂歌集）

◆龍田姫せうかちけにや成ぬらん
しょっとは時雨しょっとしくる、
（堀川狂歌集）

◆あふりくふ貝もいろりの田楽に
くしくし思ふ事そわする、
（貞徳百首狂歌）

◆くい〳〵と物を思ひてきのくさるを
何としてかなぬひてすつへき
（堀川狂歌集）

◆小しちよりくるとはいはしかりたかに
鳴なる聲はふと〳〵として
（堀川狂歌集）

◆しはらくはむなさはきしてしは〳〵と
ふるひ聲なる新枕かな
（堀川狂歌集）

◆びらしやらと風にみたれてやうすよき
ほそりすわりの柳こしかな
（貞徳狂歌集）

◆餌さしめかちやくとさすへきさをの川
ふ用心にもなくちとりかな
（狂歌三百首抄）

◆はなの露も日かけうつれはひるにしほ
ひるはしほ〳〵なれるあさかほ
（狂歌三百首抄）

◆足をともせてねち〳〵とふりくるは
はるさめうしや引出すらん
（堀川狂歌集）

◆うち出んことは、なへてうれしさに
にんにとわらふ新まくら哉
（堀川狂歌集）

◆丑の日に思ひそめてやたら〳〵と
あはて長ひく恋もする哉　（堀川狂歌集）

懸詞・語呂合せのために、いくらか語形が変っているとは考えられるが、「ふと〳〵と」以外は擬音性が強いように思われる。

最後に「**特色ある語**」について記述する。

◆道くらくおも荷につられころふたは
霧したんとやまかふ成らん　（堀川狂歌集）

「キリシタン」と「霧した」の懸詞・語呂合せと見られる。

◆観音の堂に打ふたらく書を
かたみに残す諸国順礼　（堀川狂歌集）

「打札」と「普陀落」と「落書」の三語が懸詞・語呂合せになっていると見られる。此後、紙数の関係から、用例のみにとどめる。

◆礫文字打つけ書にする時ハ
薄き屏風の紙や破れん　（古今夷曲集）

◆ひとよにてあれかし事はそひふしに
ゑりのうすきやさくられにけん　（堀川狂歌集）

◆ゑりうすき身には殊更恋風の
引き易くして胸そせかる、　（後撰夷曲集）

◆押とめん押売押かひとり〳〵の
事もなくなる山さきの関　（堀川狂歌集）

◆なには人身をつくしつ、うりぬれは
枯たる芦か御足にそなる　（貞徳百首狂歌）

◆荻あめる戸たゝく風や秋のくる
おさきはしりの案内のこゑ　（堀川狂歌集）

◆うすくふるかたひら雪の上に又
紋やつけんとちるたひら雪　（貞徳百首狂歌）

◆はけ山もかすみそめぬる春の日に
きんかあたまは猶そかゝやく　（堀川狂歌集）

◆鷹匠衆かたりあはするむしろにて
こもつちこえをきゝなそらしそ　（堀川狂歌集）

◆すそひえていくたひとなく夜起する
腹はしもはら足はしもはれ　（堀川狂歌集）

◆すかみこのおもてをみても恨ても
かはらぬ君か心こはさよ　（堀川狂歌集）

……左のなまもみなるすかみこは心やはらきてこそきこえ侍れ……

◆この花に執心とむる人や皆
たいゆうれいの梅と成らん　（貞徳百首狂歌）

◆死ぬるとてこせぬ事をしたいたは
そもたれ人の所行無常そ　（堀川狂歌集）

◆旅地以後物をもくはて田をつくる
苗代餓鬼と人やみるらん　（堀川狂歌集）

◆にけはくち打ほうけてやほこらさへ
あらせるさいの神無月哉　（堀川狂歌集）

◆またしらぬ恋のしやうをならへとや
にはくなふりのきてなふるらん　（堀川狂歌集）

◆音もせぬ盗人雨の春の夜を
誰かぬれ衣になさんとやふる　（堀川狂歌集）

◆ねめこともきかすうつけのはくちにも
銭やみなつきはらひ成らん　（堀川狂歌集）

◆朝臼のはなめつらしきふのやきも
ひなたにをけはねくさくそなる　（堀川狂歌集）

◆みとり子ののゝとゆひさし見る月や
教へのまゝの仏成らん　（堀川狂歌集）

◆松の葉のあいにあられのはさかるは
　氷餅をやかみくたくらん　（堀川狂歌集）

◆まをとこをもたる女のこひせしと
　いふともはてはみそきはなそき　（狂歌三百首抄）

◆老若の品かはりたるふところ火
　さこそいろりも哀とはみし　（堀川狂歌集）

◆あさくてもことはかけぬに秋霧を
　たててふかきはへたりちぎ哉　（堀川狂歌集）

◆びらしゃらと風にみたれてやうすよき
　ほそりすわりの柳こしかな　（貞徳狂歌集）

◆たゝ一夜又ともあはぬ我中は
　まくれあたりのへたのうらなひ　（堀川狂歌集）

◆はな染にあらぬ紙子は餅そくゐ
　おしく思はぬころもかへかな　（堀川狂歌集）

◆花そめにあらぬ紙子はもみそくい
　おしくおもはぬころもかへかな　（狂歌三百首抄）

◆炭竈のやくたいなしな山賤や
　酒にしかへて酔てはたせる　（堀川狂歌集）

◆世をはなれかゝるさひしきめにあふと
　山いつたとや人の云らん
　山いつたとの語よをのかれぬ朋友の必い
　ふへき事にこそ　（堀川狂歌集）

◆らう人にみやこのはなよさくらあざの
　おふものおほしうらなへをせよ　（堀川狂歌集）

◆旅ねして思ひ出れはふる郷の
　子もち莚にしく物そなき
　はたこやに宿かりてねし一夜妻
　した、か銭をおきそ別る　（堀川狂歌集）

◆朝數奇に朝露淩き露次入を
　大事にかくる友なひの袖　（堀川狂歌集）

◆やまぶきの花の金の丸かせを
　沙金にしてまくや春風　（貞徳百首狂歌）

◆足をともせてねち〳〵とふりくるは
　はるさめうしや引出すらん
　春雨のこつふになりてふりくるは
　のとかに永き日たちころ哉
　左歌はるさめうしもねちみやくはし侍れ共右のこつふなる
　ひたちころはたくみにこそ侍れ可為勝。　（堀川狂歌集）

◆路の字を露と名付るゑほし親は
　あまかふりをやおんにきすらん　（堀川狂歌集）

◆夜な〳〵にかのこをねらふますらおか
　まふしつへたるすみのめをして
　……まふしつへたる猟師は……すみのめもかとらしく見え
　侍れは……　（堀川狂歌集）

◆冬の物を夏にもなれはしちに又
　をくこそけふの衣かへなれ
　左歌かせさふらいの躰と見えたり、当世はものことに花麗
　に成てしんこ馬にもうちなし地の鞍ををき身はなら刀なれ
　ともさやは花かいらきにし、具足よりは高直成羽織はかま
　をきずしては公界のならぬやせ奉公人の、さすかに妻子の
　かつゆるを見てはしちをゝかては一日もたすけんやうなし
　と見えたり。　（堀川狂歌集）

◆まむ丸にかひこやしつゝ今宵しも
引まめの子のもち月の駒
長旅を引てのほれはうちきせし
はたせのこもゝきれはらの駒
左歌まことにむま〳〵しくもきこえ侍る、右きれはら駒も一ふしおかしくは侍れと御調の駒にはふさたなるやうにも侍らんか、まめのこには今少心ひかれ侍らん

（堀川狂歌集）

最後に、語構成要素として目に留るものを若干挙げておく。

まるぬれ（丸濡）、くひつけて（食付）、めつらしがほ、秋くちに成、しろふとすき（素人好）、なまつ尾なり（鯰尾成）、聞ざめ（醒）、刀をさしさまに、調子はくれにて、かひこけて（買負）、こけふり（転振）、いけんくさし（意見臭）

おわりに

しばらく「狂歌」を見てきて、少々強い興味を覚え、今後とりくんで見ようと思っている。いま、とりあえず第一段階として、あらあら目を通した結果をまとめてみた。紙数の点もあり、十分意を尽くせなかった。すべて他日を期すこととする。

（一九八二、四、十）

註1、「日本文学大辞典」（新潮社）「狂歌」の項（野崎氏担当）による。

註2、近世文学書誌研究会編「近世文学資料類従・狂歌編1～6」（勉誠社）などによる。

註3、「古今和歌集」の使用語（和歌のみ）は、約一万八千語弱。うち代名詞は二九〇語余（一・一％）接続詞は五語（さ・さて・さらば・さりとて）である。

註4、「密田教授退官記念論集」所収の拙稿「談林俳諧の一考察—付合の意味について—」

註5、「文字詞について(一)・(二)—近世語研究その二—」金沢大学教育学部記要31号・32号所収。

註6、「『やつこはいかい』のことばの研究—近世語研究その一—」金沢大学教育学部記要30号所収。

（金沢大学教授）

受贈雑誌一覧その二

国文学ノート　第二十号　成城大学短大国文学研究室
国文学雑誌　第三十号　藤女子大学短大国語国文学会
甲南国文　第三十号　甲南女子大学国文学会
国学院大学日本文化研究所報　第五十号　国学院大学日本文化研究所
国語と教育　第十号　大阪教育大学国語教育学会
帝塚山学院大学日本文学研究　第十四号　帝塚山大学日本文学会
東京女子大学日本文学　第五十七号　東京女子大学日本文学研究会